

化学者コミュニティの良識—論説委員会の発足にあたって

日本化学会会長 御園生 誠
論説委員会委員長 村井 真二

化学・化学技術にかかわる問題をタイミングよくとりあげ、それについての化学者・化学技術者としての見解を「論説」の形で、機関誌、ホームページなどに掲載するため、論説委員会をスタートすることになりました。論説を通して、会員さらには一般社会に、化学者コミュニティの判断を伝え、必要なら論議を通して、それぞれの課題に関して適切な共通認識に至ることを目的としています。

日本化学会が、率先して、化学者コミュニティからの情報や意見を社会に対して発信すべきであるとの意見は、かなり以前からありましたが、学会が具体的にどのような形で発信し、どのような責任をとるべきかで意見が分かれ、なかなか実現しませんでした。この度のスタート後も必要な手直しを加え、社会から受け入れられるような論説欄をめざします。

「論説」は署名記事で、論説委員会で審議して発表しますが、文責は執筆した論説委員にあります。運営会議は、その内容が多くの会員の良識を代表しているものとしてこれを支持することになっています。もちろん会員の意見は様々でありましょうし、論説が正しいという保障もありません。論説に対する異論反論は大いに歓迎するところで、論議を通じて、水準の高い適切な共通認識に到達することを期待しています。会員諸氏のご理解とご支援をお願いいたします。

論説委員会は以下のメンバーで始めます。是非ご期待下さい。第1回は次号(2月号)の予定です。

論説委員長



村井真二 独立行政法人 科学技術振興機構首席フェロー

〔経歴〕1966年大阪大学工学系博士課程修了、同年大阪大学工学部助手、助教授を経て87年同大学教授、99年同大学退官、同年より現職。96、97年日本化学会副会長、2002年有機合成化学協会会長、84年日本化学会学術賞、97年日本化学会学会賞。〔専門〕有機化学。〔趣味〕陶芸、絵画。〔抱負〕今日のように社会が複雑になると、多種多様な立場があり、すべての人から賛同が得られる一つの意見というものはほとんど存在しなくなる。多くの立場多くの意見がある中でこそ「論説」というものが意味を持つことになろう。「論説」とは利益相反の場にあえて提出される意見という性格を本来具えている。将来を見通したビジョンのある軸からの意義ある論説でありたいと願っている。

論説委員



相澤益男 東京工業大学学長

〔経歴〕1971年東工大大学院博士課程修了、同大学助手、筑波大学助教授、86年東工大教授、生命理工学部長、副学長、2001年学長、03年国立大学法人東京工業大学学長。日本学術会議会長、文部科学省大学設置・学校法人審議会会長、国立大学協会副会長等を務める。日本化学会賞、その他受賞。〔専門〕生命工学、バイオエレクトロニクス、生命電気化学。〔抱負〕知の時代における学会の果たすべき役割は重い。しかしながら、余りにも数多くの学会が競合するなかでは、個々の存立基盤に執着する余り、学会の使命を忘れがちである。原点に戻り、科学技術の進むべき方向、社会とのかかわり等の議論を踏まえつつ、化学の拓く未来を考えるべきであろう。



小野田 武 日本大学教授

〔経歴〕1961年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了、同年三菱化成工業(株)(現三菱化学(株))入社、69年Würzburg 大学理学系研究科博士課程修了、89年同社取締役研究開発室長、92年同社常務取締役総合研究所長、97年同社専務取締役、99年同社顧問、2002年同社退社、同年より現職。83年&87年日本化学会化学技術賞受賞。〔専門〕触媒化学、科学技術戦略、工学教育。〔趣味〕スキー、美術鑑賞、音楽鑑賞。〔抱負〕しばらく化学及び日本化学会から離れていました。どちらかと言うと技術者コミュニティに浸って、広く工学他分野との親和性を強めての里帰りです。超え難い違和感をもつての議論となるか、案外、意思の疎通が容易なのか。楽しみにしながら、激変するであろう新しい時代における化学と化学コミュニティを語り合えればと思っています。



北澤宏一 独立行政法人 科学技術振興機構理事

〔経歴〕1972年MIT 材料科学専攻博士課程修了、73年東京大学工学部合成化学科助手、物理工学科講師、助教授を経て87年同工業化学専攻教授。その後、超伝導工学専攻、応用化学専攻、新領域創成科学研究科物質系専攻に配置換え、2002年同大学辞職、科学技術振興事業団専務理事就任、03年(独)科学技術振興機構理事就任。88年日本セラミックス学会大賞、応用物理学会賞受賞、02年紫綬褒章受章。〔専門〕材料科学。〔趣味〕スキー、ラグビー、唄、談笑。〔抱負〕我が国は飽食・ものあまり・サービス過多の時代にある。現在に至るまで、輸出は高率の増加を続け、世界最大の貿易黒字を20年間以上継続。91年には世界最大の海外純資産保有国となり、現在までにさらに倍増させた。その国が90年以降GDPに飽和をきたし、失業が増えたままとっている。また、国民は未曾有の個人資産を老後用に貯蓄し、政府に貸し付ける国となった。これらの事実を総合すると、従来にない価値を入手する時代を迎えないと日本ではGDP飽和時代が継続されることを意味する。環境産業が国民に新たな価値としての存在を主張し、これからのGDPを牽引する大きな産業に育つと考える。



黒田玲子 東京大学教授、総合科学技術会議議員

〔経歴〕1975年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、同年ロンドン大学キングスカレッジ化学科 Research Associate、同生物物理学科 Research Fellow, Honorary Lecturer、英国癌研 Non-clinical Senior Scientistを経て、86年東京大学助教授(教養学部化学教室)、92年同教授、96年より現職。2001年～内閣府総合科学技術会議議員。93年猿橋賞、94年日産科学賞、03年モレキュラーキラリティアワード、04年山崎貞一賞。〔専門〕生物物理化学、カイロモルフォロジー。〔抱負〕20世紀には科学技術は飛躍的に進歩し生活を豊かにしたが、予期せぬ環境の破壊、生物としての人の位置づけの曖昧化など、陰の部分も顕在化してきた。それらを解決するにも科学の力は必要である。科学の中でも化学は我々の「life」のあらゆる側面で重要な働きをしているにもかかわらず、化学物質=有害人工化合物と受け取られ、一般市民の印象が悪い。社会の中の化学の視点に立って双方向性で我々全員が化学のおもしろさ、重要性、それと同時に危険性も理解し、化学と賢くつきあっていかなくてはならない。現役の研究/教育従事者、総合科学技術会議・中教審など公共政策に関与している立場から、何かお役に立てればありがたい。



澤平光男 京都大学教授

〔経歴〕1979年京都大学工学研究科博士課程修了(高分子化学専攻),工学博士,80年米国アクロン大学高分子科学研究所客員研究員,81年京都大学工学部高分子化学科助手,91年同講師,93年同助教授,94年同教授,96年より改組・現職,95年 Editor, *J. Polym. Sci., Part A: Polym. Chem.*。92年高分子学会賞,99年日本化学会学術賞,2002年米国化学会 The Arthur K. Doolittle 賞 (PMSE 部門) 受賞。〔専門〕高分子化学・高分子精密合成。〔趣味〕読書(推理小説,科学技術,航空宇宙など)。〔抱負〕化学の中心的学会として,日本化学会の役割は内外ともにますます重要であることは論を待たない。化学分野の研究・教育の活性化と発展及び将来展望,社会と化学とのかかわり,独立法人化後の大学との関係,産官学連携,国際交流と国際貢献など,日本化学会が見識と貢献を問われる課題も数多い。これらについて微力ながら考える機会とし,会員諸氏との議論を深めることができれば幸いと思う。



中村栄一 東京大学教授

〔経歴〕1978年東京工業大学理学専攻科博士課程修了,同年米国コロンビア大学化学科博士研究員,80年東京工業大学理学部助手,84年東京工業大学理学部助教授,94年東京工業大学理学部教授,96年東京大学大学院理学系研究科化学専攻教授。92年日本 IBM 科学賞受賞,2001年名古屋メダル受賞,02年日本化学会賞受賞。〔専門〕有機化学。〔抱負〕昨年秋,日本学術振興会学術システム研究センターが発足し,ここに常勤の主任研究員として勤務している。本センターは,行政と研究現場をつなぐ我が国初のプログラムディレクター・オフィサー制度を具現化したものである。一方で今,社会の諸問題に解決の糸口を与える物質科学研究に寄せられる期待は大きい。今回の論説委員就任にあたり,学術研究の体系及び化学研究のあり方の両面から化学会会員のお役に立てよう努力したい。



細矢治夫 お茶の水女子大学名誉教授

〔経歴〕1964年東京大学化学系大学院博士課程修了(理博),同年理化学研究所研究員,69年お茶の水女子大学理学部化学科助教授,86年同大学学生部長,90年同大学理学部長,2002年同大学定年退職(情報科学科),名誉教授。〔専門〕理論化学,数理化学,情報化学(化学教育)。〔趣味〕パズル,多面体,ナンバーコレクション等々。〔抱負〕先進諸国に限らず発展途上国においても,教育,特に科学教育重視の施策が行われているのに,我が国の施政者や高級官僚の認識は甘く,危機感希薄である。さらに我が国では「科学技術」という曖昧な言葉が横行し,「科学」と「技術」の違いと関係についての正しい理解は一般になされてない。「化学物質」という言葉も,「有毒物質」や「有害物質」と同一視されている。また,限りある資源とエネルギーの下で,人類が生き延び文明を維持して行くためには,化学者集団が中心的な役割を果たす存在であるという一般の認識もない。日本化学会は,このような科学・化学・教育についての世間の誤った認識を是正し,リードすべき責務をもっている。



安井 至 国際連合大学副学長

〔経歴〕1973年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了,同年東京大学工学部助手,75年東京大学生産技術研究所講師,90年同教授,96~99年東京大学国際・産学共同研究センター長,2003年国際連合大学副学長。〔専門〕無機材料化学,環境科学,LCA。〔趣味〕以前はテニス,スキー。今は?。〔抱負〕2050年の日本は,エネルギー効率で4倍,物質利用効率で8倍を達成していない限り持続型社会とは言えないだろう。しかし,この状況を技術だけで実現するのは難しい。市民レベルでの価値観の変革が必要である。日本という島国に住むと,ややもすると地球全体の状況を忘れがちである。開発論を含め,地球環境問題への取り組み方や,国内・国際両面での環境教育に貢献できればと願っている。



山辺正顕 独立行政法人 産業技術総合研究所研究コーディネーター

〔経歴〕1965年京都大学大学院工学系研究科修士課程修了,同年旭硝子株式会社入社,99年旭硝子(株)取締役中央研究所長退任,2001年(独)産業技術総合研究所研究センター長就任,04年から現職,90年から国連環境計画(オゾン層保護に関する技術・経済評価委員会)の委員として活動。82年高分子学会技術賞受賞,84年,日本化学会化学技術賞,市村賞,ソーダ工業会技術賞受賞,97年米国 EPA オゾン層保護ベスト・オブ・ベスト受賞。〔専門〕フッ素化学,環境科学。〔趣味〕テニス,ゴルフ,読書,旅行。〔抱負〕ここ数年産業界あるいは公的機関からの立場で日本化学会の運営に深く関与してきて,日本化学会からもっとも外部にメッセージを発信すべきだと感じておりました。かねてから「化学と工業」誌に巻頭言がないのはおかしいという意見も多くなりましたが,このたび『論説』を掲載して大いに議論を喚起しようという試みがなされるということで,大いに楽しみにしております。論説委員の一人として推挙されたことは大変光栄ですが,このような大役をこなせるかどうか不安で一杯です。しかし折角の機会ですので自分なりに自然体で頑張ってみようと思っております。



渡辺 正 東京大学教授

〔経歴〕1975年東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学(76年修了),75年同大学工学部助手(79~80年西独マックスプランク協会ブリッツハーバー研究所研究員),85年同大学講師,86年助教授,92年より現職。82年電気化学協会進歩賞受賞。〔専門〕生体機能化学・電気化学・環境科学など。〔趣味〕雑誌・翻訳。〔抱負〕いま日本は食料の38%を捨てる。それを年額にした11兆円は農業・漁業の国内総生産額にほぼ等しいけれど,捨てる営みが雇用を生み,経済を回す。そうした途方もないムダに支えられた社会では,もはや正邪・善悪・是非といった二元論に力はなく,「許せるムダ」と「許せないムダ」を見分けるくらいが関の山か。仮に子どもの理科離れや学力低下が事実だとしても,「豊か」になってしまった社会の産物なら,教育方法をいじってどうにかなるものではない。そんなスタンスで,経験が多少ある初中等教育問題や環境問題につき(後者は安井委員と似ないよう心がけつつ)私見を述べ,学界や社会の風通し改善にいささかでも寄与できればと願っている。